

我が馬券哲学

菊池寛

青空文庫

次ぎに載せるのは、自分の馬券哲学である。数年前に書いたものだが、あまり読まれていないと思うので再録することにした。

一、馬券は尚ぜんき禅機ぜんきの如し、容易に悟りがたし、ただ大損をせざるを以て、念とすべし。

一、なるべく大なる配当を獲えんとする穴買主義と、配当はともかく勝馬を当んとする本命主義と。

一、堅き本命を取り、不確かなる本命を避け、たしかなる穴を取る、これ名人の域なれども、容易に達しがたし。

一、穴場に三、四枚も札がかかると、もう買うのが嫌になる穴買主義者あり、これも亦馬券買いの邪道。

一、穴場の入口の開くや否や、傍目わきめもふらず本命へ殺到する群集あり、本命主義の邪道である。他の馬が売れないのに配当金いずれにありやと訊いて見たくなる。甲馬乙馬くばくに幾何の投票あるゆえ丙馬を買って、これを獲得せんとするこそ、馬券買の本意ならずや。

一、二十四、五円以下の配当の馬を買うほどならば、見ているに如しかず、何となれば、世に絶対の本命なるものなければ也。

一、然れども、実力なき馬の穴となりしこと曾てなし。

一、甲馬乙馬実力比ひつてき敵し、しかも甲馬は人気九十点乙馬は人気六十点ならば、絶対に乙を買うべし。

一、実力に人気相当する場合、実力よりも人気の上走する場合、実力よりも人気の下走する場合。最後の場合は絶対に買うべきである。

一、その場の人気ふつとうの沸騰とらに囚われず、頭を冷徹に保ち、ひそかに馬の実力を考うべし。その場の人気ほど浮薄なるものなし。

一、「何々がよい」と、一人これを云えば十人これを口にする。ほんとうは、一人の人気である。しかも、それが十となり百となっている。これ競馬場の人気である。

一、「何々は脚がわるい」と云われし馬の、断然勝ちしことあり、またなるほど脚がわるかったなとうなずかせる場合あり。情報信ずべし、しかも亦信ずべからず。

一、甲馬乙馬人気比敵し、しかも実力比敵し、いずれが勝つか分らず、かかる場合は却つて第三人気の大穴を狙うにしかず。

一、大穴は、おあつらえ通りには、開かないものである。天の一方に、突如として開き、ファンをあつけに取らせるものである。何々が、穴になるだろうと、多くのファンが考えている間は、絶対にならないようなものである。それは、もう穴人気と云つて、人気

の一種である。

一、剣を取りて立ちしが如く、常に頭を自由に保ち固定觀念に囚われること勿れ、なか偏愛の馬を作ること勿れ。レコードに囚われること勿れ、融通無碍しかも確固たる信念を失うこと勿れ。馬券の奥堂に参ずるは、なお剣、棋の秘奥ひおうを修めんとするが如く至難である。

一、一日に、一鞍か二鞍堅い所を取り、他は悉く休む人あり、小乗なれども亦一つの悟道たるを失わず。大損をせざる唯一の方法である。

一、損を怖れ、本命々と買う人あり、しかし損がそれ程恐しいなら、馬券などやらざるに如かず。

一、一日に四、五十円の損になりても、よき鑑定をなし、百四、五十円の中穴を一つ当てる快味あれば、償うべし。

一、百二、三十円の穴にても、手柄の上では二百円に当るものあり、二百円の配当にても、手柄の上ではくだらぬものあり、新馬の二百円をまぐれ当りに取りたるなど、ただ金を拾つたのと、あまり違わない。

一、よき鑑定の結果たる配当は、額の多少に拘わらず、その得意は大なり。まぐれ当りの配当は、たとい二百円なりとも、投機的にして、正道なる馬券ファンの手柄にすべきものにあらず。

一、人にきいて取りたる二百円は、自分の鑑定に取りたる五十円にも劣るべし（と云うように考えて貰いたいものである。）

一、サラブレッドとは、如何なるものかも知らずに馬券をやる人あり、悲しむべし。馬の血統、記録などを、ちつとも研究せずに、馬券をやるのはばくち打である。

一、同期開催済の各競馬の成績を丹念に調べよ。そのお蔭で大穴を一つ二つは取れるもの

である。

一、必ず着ちやくに来るべき剛強馬二、三頭あるとき、決してプラッセの穴を狙うなかれ。たとい適中するとも配当甚だ少し。

一、プラッセの配当の多寡は、多くは他の人気馬の入線如何による。その点に於て、より偶然である。むしろ単勝の大穴を狙うに如かず。

一、厩舎うまやよりの情報は、船頭の天気予報の如し。関係せる馬についての予報は精しけれども、全体の予報について甚だ到らざるものあり。厩舎に依りて、強がりあり弱気あり、身びいきあり、謙遜あり、取捨選択に、自己の鑑定を働かすに非ざれば、厩舎の情報など聞かざるに如かず。

一、自己の研究を基礎とし人の言を聴かず、独力を以て勝馬を鑑定し、迷わずこれを買ひ自信を以てレースを見る。追込線に入りて断然他馬を圧倒し、鼻頭を以て、一着す。人

生の快味何物かこれに如かんや。而もまた逆に鼻頭を以て破るるとも馬券買いととして「業在り」なり、満足その裡うちにあり。ただ人氣に追隨し、漫然本命をかうが如き、勝負かかに拘わらず、競馬の妙味を知るものに非ず。

一、馬券買に於て勝つこと甚だかたし。ただ自己の無理をせざる犠牲に於て馬券を娛しむこと、これ競馬フアンの正道ならん。競馬フアンの建てたる蔵のなきばかりか（二、三年つづけて競馬場に入りにする人は、よっぽど資力のある人なり）と云わる、勝たん勝たんとして、無理なる金を賭するが如き、慎しみてもなお慎しむべし。馬券買いは道楽也。散財也、真に金を儲けんとせば正道の家業を励むに如かず。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆96 運」作品社

1990（平成2）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「菊池寛文学全集 第八卷」文藝春秋新社

1960（昭和35）年10月

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

我が馬券哲学

菊池寛

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>